



私は、物心がついた幼少の頃から高校生になる頃まで、両親から、寝る時には必ずズボンや服などを折りたたんで枕元に置き、いつでも着て逃げられるようにしておくように、しつこく言われ続けてきました。それは、両親が昭和の南海地震で次のような体験をしたことに基づいた教えでした。

「……昭和二十二年二月二日、今まで経験したことのないドーンという音とともに、大きな縦揺れで目が覚めた。すぐに大きな横揺れで家がぐらぐらと揺れ始め、タンスは倒れ、家中の物が落ち、今にも家が倒壊しそうになった。海からはゴート、今までに聞いたことのない不気味で大きな音が聞こえてきた。外からは「津波だ、早く山に逃げる」と怒鳴り声が聞こえた。着の身着のまま外に出ると、屋根瓦の落ちる音、家屋の崩れる音があちこちから聞こえてきた。

荷物を持ち出す時間も余裕もなく、また避難する人々でパニック状態の中、三ヶ月の乳飲み子と三歳の子どもを抱きかかえ、また後には四人の子どもを従え、暗闇の中を近くのけわしい山道を必死に駆け上がって避難したが、どこをどのように避難したのかはほとんど記憶がない。

百メートルほど登ってやっと我に返ったが、恐怖と寒さのため体の震えが止まらない。しばらくは話すことも立つこともできなかった。……」

南海地震を経験した両親の貴重な教えを無にしないように、この話は子や孫にも語り継ぎたいと思っています。

昭和30年代以前

背景

昭和21年（1946）の南海地震を体験した両親は、その時の様子や教訓を子どもに伝えていました。災害体験やそれに基づく教訓は、語られなければ風化してしまいます。教えを思い出し、実行することにより、両親の思いは子に、孫に伝えられていきます。この話は、親など身近な人が、災害体験を後世に伝えることの大切さを物語っています。

アクセス

津波十訓の石碑

- 海陽町浅川出張所より南西へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度 北緯33度37分24秒、東経134度21分41秒

